

大学生の「甘え」と友人関係

玉瀬 耕治・富平美智子

大学生の対人関係を考える上で、「甘え」の問題を取り上げることは発達心理学的にも臨床心理学的にも興味深いものがある。土居（1971）が「甘え」の概念を提起して以来、国内外の研究者の間で「甘え」をめぐるさまざまな議論が展開されてきた（Behrens, 2004; 土居, 1985; 1993; 2001; 熊倉, 1993; Markus & Kitayama, 1991; 李, 1982; Rothbaum & Kakinuma, 2004; 竹友, 1988; 山口, 1999）。幼児期における甘えに端を発して成人期における甘えにいたるまで、「甘え」の問題は多様な角度から取り上げることができる。土居（1971）は、「甘えの心理は、人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとすることである」と述べている。生後8, 9ヶ月の頃に見られる人見知りの現象は、認知能力の発達にともなう分離不安の現われであるとみなされるが、それをどのように克服していくのかに、「甘え」を論じる鍵が潜んでいる。子どもの側からと親の側からの相互の意思伝達の在り様によって、「甘え」のパターンは形成される。そのパターンの集積によって、異なる「甘え」の類型が決定づけられることになる。最近の「甘え」とアタッチメントを対比して論じたRothbaum & Kakinuma（2004）の論考は、両者がともに自我の安定を求める欲求に根ざすものであるとしながらも、その背後に潜む文化の違いを問題にしている点は興味深い。すなわち、彼らは親の側からのかかわり方の違いによって、「甘え」は所属集団の中での安心を獲得していく過程へと発展し、アタッチメントは信頼を基盤として自律、自尊心、アサーション能力などを獲得していく過程へと変容していくと考えている。

土居（2001）はその後、「甘えとは、人間関係において相手の好意をあてにして振舞うことである」と再定義している。この定義も、最初の考えを変えることなく、より具体的な表現で「甘え」を定義づけたものとみなされる。相手の好意をあてにした振る舞いが、日本社会では受け入れられるゆえに、成人においても「甘え」が発達するといえる。ただし、成人における好ましい「甘え」は限定的にしか許容されるものではないことに留意しなければならない。筆者らは、大学生における「甘え」について探求し、他者に対して甘えを求める（甘え希求）と同時に他者からの甘えを受け入れようとする（甘え受容）ような「相互依存的甘え」をより好ましい甘えとみなし、実証的にそのことを示してきた（玉瀬・相原, 2004; 2005, 玉瀬・今村, 2006; 玉瀬・岩室, 2004; 玉瀬・脇本, 2003）。

このような考え方を前提にして、青年期の友人関係について考えてみよう。難波（2004）は1993年から2004年までの約10年間の青年期を対象とした友人関係の研究を展望し、友人関係の発

達的变化、自己形成に与える影響や自己意識との関連などの要因を取り上げている。廣實（2002）は青年の友人関係に関する研究について概観し、いくつかの現代青年の特徴を指摘している。その中で、「希薄化」と呼ばれる現象があげられている（松井，1990；岡田，1995；上野・上瀬・松井・福富，1994）。これは友人と心理的な距離をとりながらも同調的な態度を示す関わり方を意味している。例えば、上野ら（1994）は、友人への同調と友人との心理的距離のとり方の2点に焦点を絞っていくつかの心理的特性との関連を検討している。彼らは、交友関係のスタイルとして、表面群（心理的距離大、同調性高）、個別群（心理的距離大、同調性低）、密着群（心理的距離小、同調性高）、独立群（心理的距離小、同調性低）の4群を区別した。これらのうちで、心理的距離が大きくかつ同調性が高い表面群は、公的自意識、劣等感、問題行動念慮、家庭適応などの尺度において「群れ志向」と呼ばれるような特徴を示すことが示唆された。すなわち、この群は他者の目を気にして他者との調和を重視する傾向があり、行動上では優等生的である。しかし、同調的行動をとりつつも集団的な生き方は望んではおらず協同的でもない。ただ集団から外れまいとして群れているだけなのである。このような表面群には、精神的な不安定さも認められる。

岡田（1999）は、認知された友人関係と自己意識の関連を検討し、現代青年は自分以上に友人の中に、積極性、軽薄性、親依存性などの特質を見出す傾向があることを示している。また、内面的関係を求める点で、伝統的青年観（自己に対する内省の高まり、同性の親しい友人との親密な関わり）に近い友人関係を求めているながら、それとはことなる関わり方をしていることを示唆している。

これらの青年期における友人関係に関する最近の研究動向をふまえつつ、本研究では「甘え」と良好な友人関係との関連について検討したい。廣實（2002）は先述の論文において、青年期の友人関係に関連する要因として、自己受容性や他者からの受容感を挙げている。下斗米（2000）は、友人関係における親密化の過程で、互いに役割行動を遂行することの意義を指摘している。大学生の「甘え」とこれらの要因との間にはどのような関係があるのだろうか。まず発達論的な視点から、「甘え」を基盤にして良好な友人関係は築かれていくと仮定することができる。その際、「甘え」は直接的に良好な友人関係を規定するものなのか、それとも間に介在する何らかの要因を仮定すべきなのか。幼児期における「甘え」と、それを親や周囲の人たちがどう扱ってきたのかによって、異なる「甘え」の型が形成される。玉瀬・相原（2004）は大学生の「甘え」に関する多元的尺度を作成し、特性5因子との関連を検討した。彼らは「甘え」を多面的に捉え、「相互依存的な甘え」と「屈折した甘え」の2種類の「甘え」を区別した。「相互依存的な甘え」は2つの下位因子「甘え希求（甘えたい）」と「甘え受容（甘えられたい）」から成っている。これは相手との相互的な信頼関係を軸にした「甘え」であるとみなされる。「屈折した甘え」も2つの下位因子、「甘え歪曲（歪んだ甘え）」と「甘え拒絶（一方的甘え）」から成っている。これは一方的で自分本位の「甘え」であるとみなされる。これら2種類の「甘え」と特性5因子との関連を検討すると、「相互依存的な甘え」は外向性、調和性と正の相関が見られ、「屈折した甘え」

は外向性、開放性、調和性と負の相関が見られた（玉瀬・相原, 2004）。外向性は社会的で人と良い関係を築くことに関連する特性であり、調和性は日本人の人間関係において最も重視される、周囲の人と協調し合いながら関係を築いていこうとする特性である。外向性、調和性は、ともに良好な友人関係を構築するのに必要な特性であると考えられる。このことから、良好な友人関係の構築には、「甘え」の中でも特に、外向性、調和性と正の相関が見られた「相互依存的な甘え」が関係していると想定できる。逆に「屈折した甘え」は良好な友人関係を築く際の妨害要因になることが想定される。

次に、友人関係の親密化過程において重要視されるものに、友人の役割行動遂行が挙げられる（下斗米, 2000）。役割行動遂行とは、自分が友人に期待している役割行動を友人が遂行してくれていると認知することである。2者間の関わりにおいて、互いにそれぞれが期待している役割を遂行していると認知するとき、両者の関係は安定して親密化が進むと考えられる。下斗米（2000）は、役割行動因子として支援性、自律性、類似性、近接性、娯楽性、力動性の6つを取り上げた。そして友人との親密度が高くなるにつれて、それらを友人に期待する度合いは高くなり、それらを友人が遂行してくれていると認知する度合いも高くなることを示した。同性友人への期待と現実の相互作用について検討した廣岡・鶴町（2000）でも下斗米（2000）と同様に、親密度が高くなるにつれて、友人への役割行動の期待度、友人の遂行に対する認知度は高まっている。これらのことから、友人に役割行動を多く遂行されていると感じている人は、親密で良好な友人関係を築けると想定される。

次に、良好な友人関係を構築する際のもう一つの要因として、自己受容の役割について考えてみたい。自己受容とは、ありのままの自分を受け入れることであり、心理的健康の指標の一つとも見なされている。自己受容が高い人は、他者に対して信頼や愛情をもった態度をとることができる。また、他者と対立したり他者に依存したりしない。さらに対人場面においてあまり孤独感を感じていない（板津, 1994）。

さらに、自己受容と密接に関連するものとしての友人からの受容感についても取り上げてみたい。友人からの受容感とは、自分が友人に必要とされ、認められていると感じ、自分は友人に受け入れられていると感じることを意味している。大出・澤田（1988）は、自己受容を高めるには、重要な他者からの承認やサポートを受け、自分も重要な他者の何らかの役に立っているという意識が必要であると考えている。したがって、自己受容が高まるためには、友人からの受容感を感じることが必要であり、その結果としての自己受容を媒介として、良好な友人関係が構築される可能性がある。

以上のように、本研究では概ね次のような過程をへて良好な友人関係は形成されると仮定した。「相互依存的な甘え」→「友人の役割行動遂行」→「友人からの受容感」→「自己受容」→「良好な友人関係」。本研究では、このような過程を想定することが可能であるかどうかを検討した。

方 法

調査対象

調査対象は、近畿圏の2つの大学に通う大学生191名（男性59名、女性132名）、平均年齢19.2歳（ $SD=1.0$ ）であった。

調査材料

- (1) 多元的「甘え」尺度： 玉瀬・相原（2004）で作成された多元的「甘え」尺度の一部の一人称を「自分は」から「私は」に変えて用いた。変更の理由は、文章の表現を日常語としてより自然なものにするためであった。玉瀬・相原（2004）では、この尺度におけるCronbachの α 係数は4因子それぞれで $\alpha=.72\sim.80$ 、尺度全体では $\alpha=.77$ であり、内的一貫性があると判断された。この尺度は、「授業について行けないときは、誰かに助けを求めたい」、「友達が将来どの職業につくべきか迷っているときは、私が相談にのってあげたい」などの20項目から構成されている。現在の自分について、「全くあてはまらない」（1点）、「あまりあてはまらない」（2点）、「少しあてはまる」（3点）、「とてもあてはまる」（4点）の4件法で回答させた。
- (2) 友人の役割行動遂行尺度： 下斗米（2000）で作成された「役割行動遂行尺度」6因子のうち、友人同士の相互関係の中で期待される役割行動である支援性、近接性、娯楽性、類似性の4因子の中から因子負荷量が高い項目を抽出し、一部表現を補って使用した。Cronbachの α 係数は6因子それぞれで $\alpha=.77\sim.88$ の値が示されている。この尺度は、「私が苦しい立場のとき、友達は味方になってくれる」、「友達はいつも、つとめて明るく振る舞ってくれる」などの16項目から構成されている。回答方法は上記の尺度と同様の4件法であった。
- (3) 友人からの受容感尺度： 先行研究を参考にして、本研究では友人からの受容感は「気軽さ・安心」、「相互理解」、「存在感」、「承認・評価」で構成されていると考えた。そこで、西川（2000）において作成された「友達からの受容感尺度」、大出・澤田（1988）で作成された「他者からの受容感尺度」を参考に、独自に作成した「承認・評価」の項目を加えて「友人からの受容感尺度」とした。この尺度は「友達は私を気にかけてくれていると思う」、「友達は私が困っている時に元気付けてくれると思う」などの22項目で構成されている。回答方法は上記と同様の4件法であった。
- (4) 自己受容尺度： 田村・小川（1989）で作成された自己受容尺度の5因子のうち、「容姿・身体に関する因子」を除いた「高い自己信頼の因子」「努力・向上心の因子」「幸福感の因子」

「積極的に人と係わっていかうとする因子」の4因子から因子負荷量が高い項目を4項目ずつ抽出して使用した。この尺度は、「私は人と上手に付き合っていると思う」、「私は、自分の性格に満足していると思う」などの16項目で構成されている。回答方法は上記と同様の4件法であった。

- (5) 友人関係良好性尺度： 先行研究を参考にして、本研究では親密で良好な友人関係は「相互理解」、「相互信頼」、「相互尊重」から構成されていると考えた。そこで、岡田（1995）で作成された「友人関係尺度」の3因子から「内面的関係」、藤井（2000）で作成された「心理的距離の取り方尺度」の6因子から「互いを尊重する距離の取り方」、榎本（1999）で作成された「交友関係の活動的側面尺度」の4因子から「相互理解活動」、「交友関係の感情的側面尺度」の5因子から「信頼・安定」を取り上げて参考にし、「友人関係良好性尺度」を作成した。この尺度は、「友達とは気持ちを通じ合っていると思う」、「お互いに損得を考えるとなく付き合っていると思う」などの16項目で構成されている。回答方法は上記と同様の4件法であった。

調査の実施

調査は授業時間の一部を使って集団的に実施した。まず調査の意図を簡単に説明し、結果の報告を予告した上で調査への協力を依頼した。次に調査用紙6枚と表紙1枚から成る冊子を配布し、回答方法及び回答上の留意点を口頭で教示した後、回答を求めた。所要時間は約20分であった。実施の時期は2004年4月と5月の各1回であった。

結 果

尺度の分析

- (1) 多元的「甘え」尺度： 本尺度は、玉瀬・相原（2004）において「希求」、「受容」、「歪曲」、「拒絶」の4因子からなることが示されている。Cronbachの α 係数を見ると、「希求」では $\alpha=.68$ 、「受容」では $\alpha=.79$ 、「歪曲」では $\alpha=.72$ であったが、「拒絶」では $\alpha=.56$ とかなり低い値になった。しかし本研究では「拒絶」は多元的な「甘え」の1因子として欠かせないので、そのまま分析に使用することとした。表1の上欄は4つの下位尺度間の相関係数を示したものである。この表で分かるように「希求」は他の3つのすべての下位尺度と正の有意な相関が認められる。しかし、「受容」は「歪曲」とは相関がなく、「拒絶」とは有意な負の相関が認められる（項目は付表1）。「希求」と「受容」を合わせた「相互依存的甘え」については $\alpha=.74$ 、「歪曲」と「拒絶」を合わせた「屈折した甘え」については $\alpha=.71$ であった。これら2種類の甘えの間には有意な相関は認められていない（ $r=.09$ ）。以下の分析では、「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」を用いて、他の尺度との関係を見ていくことにする。

表1 「甘え」とその他の下位尺度間の相関

	希求	受容	歪曲	拒絶
希求	1.00			
受容	0.24	1.00		
歪曲	0.41	-0.02	1.00	
拒絶	<i>0.16</i>	-0.42	0.33	1.00
友人の役割行動	0.21	0.48	0.00	-0.25
対人満足・生活の充実	0.08	0.31	-0.05	-0.23
性格・能力の受容	-0.10	0.13	0.03	-0.04
受動的友人関係	<i>0.15</i>	0.40	-0.02	-0.27
相互的友人関係	-0.02	0.35	-0.09	-0.35

註1 太字は1%水準、斜字は5%水準で有意。

註2 「希求」「受容」「歪曲」「拒絶」は「甘え」の下位尺度。

「友人の役割行動」は「友人の役割行動遂行」尺度。

「対人満足・生活の充実」「性格・能力の受容」は自己受容の下位尺度。

「受動的友人関係」「相互的友人関係」は「良好な友人関係」の下位尺度。

- (2) 友人の役割行動遂行尺度： この尺度は下斗米（2000）の役割行動遂行尺度の6因子のうち
の4因子から項目を抽出したものであるが、因子分析を行った結果、1因子構造であることが
分かった。因子負荷量は.70～.48、寄与率は.36、 α 係数は $\alpha=.89$ であった（項目は付表2）。
- (3) 友人からの受容感尺度： この尺度では因子分析を行った結果、1因子構造であることが分
かった。 α 係数は $\alpha=.94$ であった。
- (4) 自己受容尺度： この尺度では因子分析（プロマックス回転）を行ったところ、2因子が抽
出された。第1因子は9項目で、「私は、今の生活が楽しいと思う」、「私は、人間関係は上手
くいっていると思う」など、生活や人間関係が良好であることを示す項目であったので、「対
人満足・生活の充実」と命名した。第2因子は7項目で、「私は、自分の性格に満足してい
ると思う」、「私は、自分の能力や才能を活かすよう努力していると思う」など、自分の性格や能
力を受け入れ、満足していることを示す項目であったので、「性格・能力の受容」と命名した。
第1因子では因子負荷量が.92～.39、 $\alpha=.87$ 、第2因子では因子負荷量が.73～.41、 $\alpha=.79$ であ
った。因子間の相関は $r=.47$ であった（項目は付表3）。
- (5) 友人関係良好性尺度： この尺度について因子分析を行ったところ、1因子構造であること
が分かった。因子負荷量は.72～.49、寄与率は.37、 $\alpha=.89$ であった。

変数間の関係性の検討

(1) 尺度の再構成

各尺度の下位尺度間の相関係数を算出したところ、「友人からの受容感」尺度と「友人関係良好性」尺度の相関が $r=.77$ となり、この2つの尺度は類似性がかなり高いことが示された。この2つの尺度は、いずれも先行研究を参考にしつつ、本研究で新たに構成したものである。このままで後の分析を続行するよりも、むしろ2つの尺度をまとめて「友人からの受容感」を含め、「良好な友人関係」の尺度とする方が本研究の目的にも合致すると判断し、2つの尺度を合わせて分析をし直すことにした。因子分析（プロマックス回転）を繰り返し行ったところ、2因子が抽出された。第1因子は14項目で、「友達は私を好きだと思っていると思う」、「友達は私をいつも支えてくれていると思う」など、友人が自分を受け入れてくれている、助けてくれていると感じていることを示す項目であったので、「受動的友人関係」と命名した。第2因子は7項目で、「お互いの気持ちを大切にしていると思う」、「友達と真剣な議論をしていると思う」など、自分たちが築いている友人関係をどのように捉えているかを示す項目であったので、「相互的友人関係」と命名した。因子間の相関は $r=.57$ であった。2因子を合わせた尺度を「良好な友人関係」尺度とした（項目は付表4）。

このように「友人からの受容感」を独立して扱わないことにしたので、当初に想定した良好な友人関係の構築過程は、各尺度間の相関係数を考慮しながら後述のように修正することにした。

(2) 変数間の相関

表1の下欄は、多元的「甘え」尺度と他の尺度の下位尺度との相関係数を示したものである。ここでは「甘え」に関する尺度以外の下位尺度間の内部相関は示されていないが、これらについては表2で見ることができる。表1の下欄から分かるように、「甘え希求」は「友人の役割行動遂行」「受動的友人関係」と有意な正の相関があった。「甘え受容」は「友人の役割行動遂行」「対人満足・生活の充実」「受動的友人関係」「相互的友人関係」と有意な正の相関があった。「甘え歪曲」はいずれの尺度とも有意な相関はなかった。「甘え拒絶」は「友人の役割行動遂行」「対人満足・生活の充実」「受動的友人関係」「相互的友人関係」といずれも有意な負の相関があった。

表2は、甘えを「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」の2尺度とし、他の尺度の下位尺度との相関係数を示したものである。

表3は、甘えを上位の2尺度とし、「自己受容」尺度、「良好な友人関係」尺度についても下位尺度を合わせた合計得点について尺度間の相関係数を示したものである。この表から分かるように、「相互依存的甘え」は「友人の役割行動遂行」「自己受容」「良好な友人関係」と有意な正の相関があった。「屈折した甘え」は「良好な友人関係」と有意な負の相関があった。また「友人の役割行動遂行」は「自己受容」「良好な友人関係」と有意な正の相関があり、「自己受容」と「良好な友人関係」とも有意な正の相関があった。

大学生の「甘え」と友人関係

これらの結果から、本研究の当初に想定した良好な友人関係を構築する過程について、次のようなパスを設定することが可能であると考えられる。すなわち、「相互依存的甘え」→「友人の役割行動遂行」→「自己受容」→「良好な友人関係」というパスである。あるいは「相互依存的甘え」→「友人の役割行動遂行」→「良好な友人関係」というパスも想定できる。「屈折した甘え」は直接的または間接的に「良好な友人関係」に妨害的影響を及ぼしている可能性もある。このようなモデルがどの程度に適切であるのかを検討するためにAmos5を用いてパス解析を行った。その結果、図1のようなパスにおいてモデルの適合度が高く（GFI=.996, AGFI=.969, RMSEA=.000）、本研究の結果から採択できるモデルであるとみなされた。すなわち、「相互依存的甘え」から「友人の役割行動遂行」が促進され、その結果として「良好な友人関係」が構築されるといえる。また、「友人の役割行動遂行」から「自己受容」が促進され、その結果として「良好な友人関係」が構築されることが考えられる。

表2 各尺度間の相関係数

	相互	屈折	友人役割	対人満足	性格・能力	受動的	相互的
相互	1.00						
屈折	0.09	1.00					
友人の役割行動遂行	0.44	-0.13	1.00				
対人満足・生活の充実	0.25	-0.16	0.41	1.00			
性格・能力の受容	0.02	-0.04	0.10	0.53	1.00		
受動的友人関係	0.35	-0.15	0.70	0.53	0.21	1.00	
相互的友人関係	0.21	-0.24	0.59	0.44	0.22	0.57	1.00

註1 太字は1%水準、斜字は5%水準で有意。

註2 「対人満足・生活の充実」「性格・能力の受容」は「自己受容」の下位尺度、「受動的友人関係」「相互的友人関係」は「良好な友人関係」の下位尺度。

表3 各尺度の上位尺度間の相関係数

	相互	屈折	友人の役割行動	自己受容	友人関係
相互	1.00				
屈折	0.09	1.00			
友人の役割行動遂行	0.44	-0.13	1.00		
自己受容	<i>0.17</i>	-0.12	0.31	1.00	
良好な友人関係	0.33	-0.21	0.73	0.47	1.00

註 太字は1%水準、斜字は5%水準で有意。

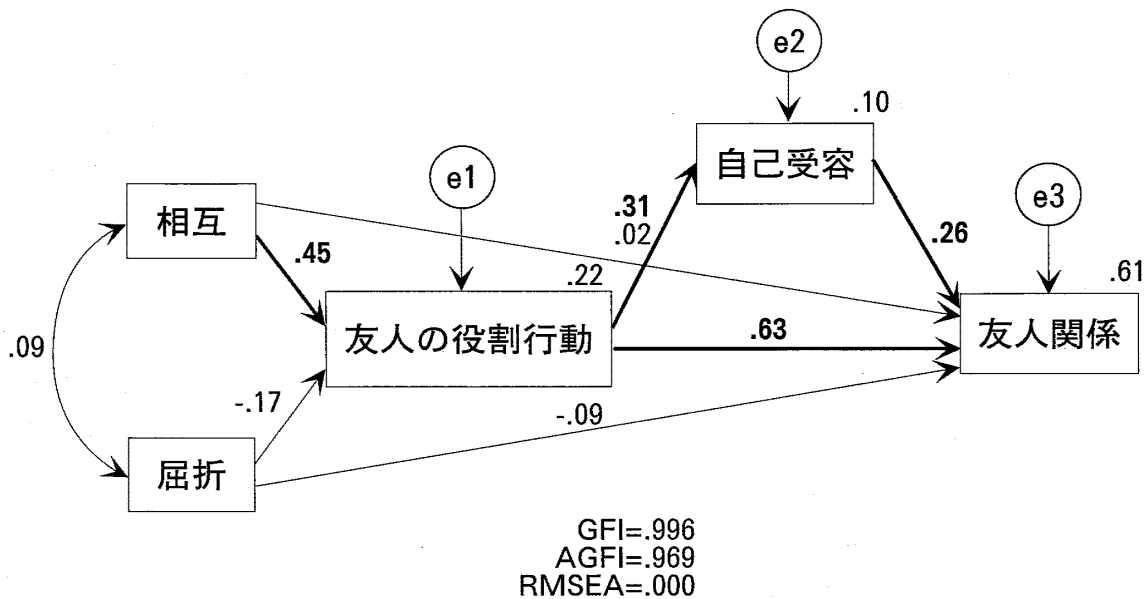


図1 「甘え」から「良好な友人関係」に至る過程を示すモデル

註1：図中の表示は以下のことを示す。

相互：相互依存的甘え

屈折：屈折した甘え

友人の役割行動：友人の役割行動遂行

友人関係：良好な友人関係

註2：数字は太字のみ有意。

考 察

初めに、「甘え」の下位尺度間の相関について見ておきたい。表1の上欄と同様の分析は、玉瀬・相原（2004；2005）、玉瀬・今村（2006）でも行っており、相互に比較することができる。本研究の結果は玉瀬・今村（2006）のものとよく一致している。玉瀬・相原（2004）、玉瀬・相原（2005）ともそれぞれ1箇所だけ相関が有意であるかどうかの違いが出ているが、それ以外では相関の方向と有意性において一致している。本研究では「希求」と「受容」を合わせた「相互依存的甘え」、「歪曲」と「拒絶」を合わせた「屈折した甘え」について主たる関心があり、以下の分析では、これら2種類の「甘え」を中心に他の尺度との関係を見ていくことにする。

パス解析で示されたように、「甘え」の中でも「相互依存的甘え」は良好な友人関係の形成に重要な役割を果たしている。その際、「甘え」が強ければそれが直接的に良好な友人関係の形成に繋がるというよりも、むしろ「甘え」が「友人の役割行動遂行」を促し、それが「良好な友人関係」を構築するのに役立つと考えられる。ここでいう「友人の役割行動遂行」とは、友人が自分の期待する役割行動を遂行してくれているという認知である。また、「友人の役割行動遂行」

は、当人の「自己受容」を促し、それが「良好な友人関係」を構築するのにも役立っている。「自己受容」は「甘え」と直接関連するものではないが、「友人の役割行動遂行」によって高められ、結果として「良好な友人関係」の構築に寄与すると考えられる。「屈折した甘え」はどちらかと言えば「良好な友人関係」を阻害する傾向にあるが、有意な関係にはなく、それほど影響するものではない。

すでに問題の所で述べたように、青年期の友人関係に関する研究は数多く行われてきているが（廣實，2002；難波，2004）、「甘え」との関連で友人関係を取り上げた研究は、筆者らの知るかぎりまだあまり報告されていない。土居（2001）が述べているように、「甘え」は対人関係を円滑にする上で不可欠なものであり、素直で健康な甘えを適度にもつことは、良好な友人関係を構築する上での促進的要因になると考えられる。自分が甘えたいという「甘え希求」と、他者からも甘えて欲しいという「甘え受容」はこれまでの筆者らの資料で見れば正の相関があり、2つの欲求はともに相補的に働いて「相互依存的甘え」を構成していると考えられる。なかでも「甘え受容」は表1の下欄からも分かるように、良好な友人関係の形成にかなり重要な役割を演じている。発達論的にも、比重の上で「甘えたい」から「甘えてほしい」へと移行するものであるように思われる。ただし、極度の「甘え受容」は、例えば親子関係で捉えた場合、むしろ病理的關係を生じる可能性もある（長，2002）。この点に関して本研究の範囲では何ともいえないが、今後に残された課題として興味深い。

「屈折した甘え」は「良好な友人関係」の構築には役立たない。「すねる」「ひがむ」などの「甘え歪曲」は友人関係の形成とはあまり関係がなかったが、「自分は甘えたいが、他者からは甘えてほしくない」という「甘え拒絶」については、表1の下欄の結果を考慮すれば「良好な友人関係」の構築を阻害する要因になっている。この甘えは自分の側には「甘えたい」欲求があり、その一方で他者からの甘えを拒むものであり、その意味で「相互依存的甘え」とは相容れないものである。この甘えは臨床的にも興味深いものであり、土居（1971，1997）はこの種の甘えを克服する過程として精神療法（心理療法）を考えてきたといえるかもしれない。

臨床研究への示唆として、「屈折した甘え」をもつ人、とりわけ他者からの甘えを拒む人には、「友人の役割行動遂行」に注意を向けさせ、友人がしてくれることに対する感受性を高めるような方向づけをすることが、「自己受容」を高め、「良好な友人関係」を創り出すのに役立つかもしれない。本研究の結果からは、友人関係の希薄化を解消するために、友人の役割行動遂行（下斗米，2000）に注意を向けさせることが有効であると考えられる。「屈折した甘え」をもつ人に、「相互依存的甘え」を導くことも結果的には良好な友人関係を構築することにつながるといえる。臨床の場において、カウンセラーがクライアントの「甘え」を促すことの意義は、このような過程を想定することによって肯定的に意味づけることができる（手塚，1998）。臨床の場において一度十分な「甘え」を体験させた後に、自己の「甘え」を客観視し、その「甘え」の肯定的意味を見いだしていけるようにすることが望まれる。カウンセリングや心理療法において、「甘え」

を適切に用いることができるように、さらに実証的研究を深めることが必要である。ただし、本研究で用いたような相関関係をベースにした分析だけでは方法論的に限界があり、さらに新しい研究方法を工夫することが望ましいことは言うまでもない。

要 約

大学生を対象にして、「甘え」と「友人の役割行動遂行」「自己受容」「良好な友人関係」の関係が調べられた。測定尺度として、「甘え」については「希求」「受容」「歪曲」「拒絶」の4つの下位尺度が用いられた。この尺度では、前の2尺度を合わせた「相互依存的甘え」と後の2尺度を合わせた「屈折した甘え」について、主に他の尺度との関係が調べられた。「自己受容」尺度では「対人満足・生活の充実」「性格・能力の受容」の2つの下位尺度が用いられた。「良好な友人関係」尺度では「受動的友人関係」と「相互的友人関係」の2つの下位尺度が用いられた。相関係数を算出し、パス解析を行った結果、「相互依存的甘え」は「友人の役割行動遂行」を促し、その結果が直接的に「良好な友人関係」を促す場合と、「友人の役割行動遂行」が「自己受容」を促し、その結果が「良好な友人関係」を促す場合があることが分かった。これらの結果に基づいて、青年期の友人関係を理解する手がかりと「甘え」に関する臨床心理学的意義が論じられた。

引用文献

- Behrens, K. Y. (2004). A multifaceted view of the concept of amae: Reconsidering the indigenous Japanese concept of relatedness. *Human Development*, 47, 1-27.
- 長憲枝 (2002). 母子間の「甘え」「甘やかし」と対人恐怖心性 日本教育心理学会第44回総会発表論文集 p.144.
- 土居健郎 (1971). 「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 (1985). 表と裏 弘文堂
- 土居健郎 (1993). 注釈「甘え」の構造 弘文堂
- 土居健郎 (1997). 「甘え」理論と精神分析療法 金剛出版
- 土居健郎 (2001). 続「甘え」の構造 弘文堂
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 藤井恭子 (2000). 大学生の友人関係における心理的距離のとり方 茨城県立医療大学紀要, 6, 69-78.
- 廣岡秀一・鶴町こずえ (2000). 同性友人への期待と現実の相互作用に関する研究 -友人アクセスビリティからの検討- 三重大学教育学部研究紀要, 51, 151-159.
- 廣實優子 (2002). 現代青年の交友関係に関連する心理学的要因の展望 広島大学大学院教育学研究科紀要 51, 257-264.
- 板津裕己 (1994). 自己受容性と対人態度との関わりについて 教育心理学研究, 42, 86-94
- 岩永 誠 (1991). 友人・異性との関係 今泉信人・南博文 (編) 人生周期の中の青年心理学 北大路書房 pp.140-152.

大学生の「甘え」と友人関係

- 熊倉伸宏 (1993). 「甘え」理論と精神療法 岩崎学術出版社
- Markus, H.R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, **98**, 224-253.
- 難波久美子 (2004). 日本における青年期後期の友人関係研究について 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 **51**, 107-116.
- 西川 潔 (2000). 児童・生徒の他者からの受容感に関する研究 奈良教育大学大学院教育学研究科修士論文
- 松井 豊 (1990). 友人関係の機能「青年期における友人関係」 齊藤耕二・菊地章夫 (編) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 pp.283-296.
- 岡田 努 (1995). 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, **4**, 62-170.
- 岡田 努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, **47**, 432-439.
- 大出美知子・澤田秀一 (1988). 自己受容に関する一研究 - 様相と関連要因をめぐって - カウンセリング研究, **20**, 128-137.
- 李御寧 (1982). 「縮み」志向の日本人 学生社
- Rothbaum, F., & Kakinuma, M. (2004). Amai and attachment: Security in cultural context. *Human Development*, **47**, 34-39.
- 下斗米淳 (2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究 実験社会心理学研究, **40**, 1-15.
- 竹友安彦 (1988). メタ言語としての「甘え」 思想 **768**, 123-125.
- 玉瀬耕治・相原和雄 (2004). 大学生の「甘え」と特性5因子の関係 奈良教育大学教育実践総合センター紀要, **13**, 23-31.
- 玉瀬耕治・相原和雄 (2005). 相互依存的甘えと思いやり、屈折した甘えと自己愛的傾向 奈良教育大学紀要 **54**(1), 49-61.
- 玉瀬耕治・今村友美 (2006). 「甘え」と愛着 (アタッチメント) 奈良教育大学教育実践総合センター紀要, **15**, 39-46.
- 玉瀬耕治・岩室暖佳 (2004). 関係性の維持と個の主張に関わる問題 - 「甘え」とアサーションを指標として - 奈良教育大学紀要 **53**(1), 37-45.
- 玉瀬耕治・脇本真希子 (2003). 大学生用「甘え」尺度の作成に関する研究 奈良教育大学紀要 **52**(1), 209-219.
- 田村富美代・小川捷之 (1989). 自己受容と対人関係 - 自己受容尺度と「甘え言語連想検査」 - 横浜国立大学教育紀要, 87-103.
- 手塚千鶴子 (1998). 「甘え」と「カウンセリング」 井上孝代 (編) 多文化時代のカウンセリング (現代のエスプリ377) 至文堂, pp.68-77.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 (1994). 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21-28.
- 山口勤 (1999). 日常語としての「甘え」から考える 北山修 (編) 日本語臨床3 「甘え」について考える 聖和書店, pp. 31-46.

付表1 多元的「甘え」尺度の項目

希求	勉強がうまく行かないときは、誰かを頼りにしたくなる。 授業について行けないときは、誰かに助けを求めたい。 私が何か新しいことを始めるときは、誰かに後押しをして欲しい。 サークル活動がうまく行かないときは、誰かに何とかしてもらいたい。 友達とけんかをしたときは、他の友達に何とかして欲しい。
受容	友達が将来どの職業につくべきか迷っているときは、私が相談にのってあげたい。 友達の日常生活に張り合いがなさそうなときは、私が相談にのってあげたい。 親しい人が落ち込んでいるときは、私が慰めてあげたい。 身近な人の体調が優れないときは、私をあてにして欲しい。 友達が勉強で行き詰まっているときは、私をあてにして欲しい。
歪曲	周りの人が私の努力を認めてくれないと、ふてくされてしまう。 身内にわがままをきいてもらえないと、ふてくされてしまう。 親しい人が私の好意に応えてくれないと、すねてしまう。 私の要望が通らないときは、ついつい相手をうらむことがある。 サークル活動がうまく行かないとき、リーダーが努力してくれないと腹が立つ。
拒絶	私はある程度約束をすっぽかすことがあっても、他人にはそうされたくない。 私の考えは周りに受け入れて欲しいが、周りの人の考えはあまり受け入れたいとは思わない。 他人にはきつい本音を言うことがあっても、他人からは本音を言われたくない。 他人には私の気持ちを察して欲しいが、私はそうしたくない。 勉強がうまくいかないときは誰かに助けて欲しいが、私は誰かから助けを求められたくはない。
註	この尺度は玉瀬・相原（2004）を基にしたものである。

付表2 友人の役割行動遂行尺度の項目

<p>友達は場の雰囲気や和ませるような話をしてくれる。</p> <p>友達は何かあるとき私に声をかけて誘ってくれる。</p> <p>私が困ったとき、友達は知恵や物を貸してくれる。</p> <p>友達は私を愉快的な気持ちにするように努めてくれる。</p> <p>私と友達は似たような考え方や感じ方をする。</p> <p>私と友達は、一緒に旅行に行ったり遊びに行ったりする。</p> <p>私と友達は同じ物を同じように感じる。</p> <p>私が苦しい立場の時、友達は味方になってくれる。</p> <p>友達はいつも、つとめて明るく振る舞ってくれる。</p> <p>友達は私を冗談などで楽しませてくれる。</p> <p>私と友達は買い物やスポーツなど一緒に出かける。</p> <p>友達は私の悩み事や愚痴などを聞いて理解を示してくれる。</p> <p>友達は私と性格が似ていることを示してくれる。</p> <p>私と友達は似たような趣味を持っている。</p> <p>友達は私に嘘や隠し事をしない。</p> <p>普段からお互いの家によく行き合う。</p>
註 この尺度は下斗米（2000）を参考にしたものである。

付表3 自己受容尺度の項目

第1因子	<p>私は、今の生活が楽しいと思う。</p> <p>私は、今幸せだと思う。</p> <p>私は、充実した生活をしていると思う。</p> <p>私は、人間関係は上手くいっていると思う。</p> <p>私は、心豊かな生活を送っていると思う。</p> <p>私は、人を信頼できるし人からも信頼されていると思う。</p> <p>私は、友達や家族との心の結びつきが深いと思う。</p> <p>私は、人と上手に付き合っていると思う。</p> <p>私は、精一杯生きようとしていると思う。</p>
第2因子	<p>私は、自分に自信を持っていると思う。</p> <p>私は、自分の優れている点をわかっていると思う。</p> <p>私は、自分の能力や才能を活かすよう努力していると思う。</p> <p>私は、自分の性格に満足していると思う。</p> <p>私は、つまらない性格の人間だと思う。*</p> <p>私は、自分を頼りないと思う。*</p> <p>私は、自分の性格の良いところを伸ばそうとしていると思う。</p>
註1	第1因子は「対人満足・生活の充実」、第2因子は「性格・能力の受容」。
註2	*は逆転項目。
註3	この尺度は田村・小川（1989）を参考にしたものである。

付表4 良好な友人関係尺度の項目

第1因子	<p>友達は私を好きだと思っていてくれると思う。</p> <p>友達は私を必要としていてくれると思う。</p> <p>友達は私を大切にしてくれていると思う。</p> <p>友達は私を頼りにしてくれていると思う。</p> <p>友達は私の存在を認めていてくれると思う。</p> <p>友達は私が困っている時に元気づけてくれると思う。</p> <p>友達は私をいつも支えていてくれると思う。</p> <p>友達と一緒にいると楽しいと思う。</p> <p>友達は私のことを良い人間だと思っていてくれると思う。</p> <p>友達は私に気楽に話をしていてくれると思う。</p> <p>友達は私がいなくなっても悲しまないと思う。</p> <p>友達は私の欠点よりも長所を認めていてくれると思う。</p> <p>友達は私の悩みや心配事をわかってくれていると思う。</p> <p>友達は私の気持ちはわかってくれていると思う。</p>
第2因子	<p>お互いの世界を尊重していると思う。</p> <p>お互いのペースを大切にしていると思う。</p> <p>お互いの気持ちを大切にしていると思う。</p> <p>友達と真剣な議論をしていると思う。</p> <p>友達を信頼していると思う。</p> <p>友達とこれからの生き方や人生観についての話をしていると思う。</p> <p>お互いに損得を考慮することなく付き合っていると思う。</p>
註	第1因子は「受動的友人関係」、第2因子は「相互的友人関係」。